

別紙 1

第 6 3 回国立大学図書館協会総会研究集会テーマ報告議事要旨

日 時： 平成 28 年 6 月 16 日（木）15：15～17:40
場 所： ホテルメトロポリタン仙台 3 階「曙」
テ ー マ： 国立大学図書館協会ビジョン 2020
司 会： 山部 俊文（一橋大学附属図書館長）
司 会 補 助： 鈴木 宏子（一橋大学附属図書館学術・図書部長）
コーディネーター： 引原 隆士（京都大学図書館機構長）
パネリスト： 竹内比呂也（千葉大学附属図書館長）
深貝 保則（横浜国立大学教授・前附属図書館長）
高橋 努（広島大学図書館部長）
杉田 茂樹（東京大学附属図書館情報サービス課長）
記 録： 小野 亘（東京学芸大学附属図書館学術情報課長）
山中 節子（和歌山大学附属図書館学術情報課長）

第 1 部：

【ビジョンの背景とねらい】

はじめに、深貝保則横浜国立大学教授・前附属図書館長から、17 世紀の学術雑誌の誕生から現在のオープンサイエンスに至るまでの大学図書館を取り巻く様々な変化に触れながら、国立大学図書館協会ビジョン 2020（以下、「ビジョン」という。）の背景について説明があった。

図書館職員は、OPAC と結びついた形でコツコツと行う時間の感覚から、ネットワーク型のコミュニケーションへの変化が進行しており、新しい変化に対応するという時間の感覚に対応しなければならない。従来の大学図書館に託されてきた役割が急速に変化してきており、オープンサイエンスを見据えて、データ公開を前提として業務を行う必要がある。

現在の職員が、そのような次のステージに対応できるようになるかどうかは非常に大きな問題である。その際、手書きのカタログから OPAC に移行した際の感覚、つまり次のステージに移る感覚を、次の世代に伝える必要がある。それが次の活路を開くことになる。

次に、竹内比呂也千葉大学附属図書館長から、ビジョンの構成とねらいについて、説明があった。

まず、これまでとは、大学図書館とはこういうものである、という暗黙的な知識・認識が大きく変わってきている。大学法人化の影響もあり、人事的な流動性、横のつながりが少なくなり、ある種の感覚の共有がなくなってきた。そのような背景を踏まえて、大学図書館の本質的な役割、これからの方向性というものを再認識する必要が出てきた、ということがビジョンを考えた発端である。

なぜ 2020 年については、このビジョンで示していることは、第 3 期中期目標・計画の期間中にできることを示しているのではなく、2020 年の段階でどこまでできたかを見直し、第 4 期に何をしなければならないかを考えるために、2020 年を一つの到達目標、ポイントであると考えている。

構成としては、3つの重点領域、知の共有、知の創出、新しい人材という整理をした。これは平成 25 年度の「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」において整理されたコンテンツ、学習空間、人的支援という 3つのポイントを元としている。

知の共有については、図書館の扱うコンテンツが今後「コレクション・グリッド」（解説図 5）のグリッド全体に広がっていく。それぞれの領域にあるそれぞれの資料の特性を活かしていくために、「教育研究成果の発信、オープン化と保存」「出版された資料の整備と利用」「知識や情報の発見可能性の向上」という領域に目標を設定した。

知の創出については、大学図書館はこれまでも人と知識、人同士のコミュニケーションの場であったが、これがラーニングコモンズをめぐって大きく変わってきた。あるいは研究を支える場をどのようにしていくか、という課題がこれから出てくる。また、大学は社会に開かれた知の創出と共有の場をどのように作り上げていくのか、という課題もあり、それは先程のコンテンツの広がりとも密接に関わっている。

そのような中で一体どのような人材が図書館に必要なのか。今回のビジョンの中で人材像は二つある。一つは今の図書館員が持っている専門性では十分ではない仕事が増えていて、新しい期待があるのだから、図書館員以外の人材を図書館に投入すればよい。もう一つは図書館員自身が機能強化をしていくことによって変わっていけばよい。そのような広がりを持たせることが、これからの図書館の人材を考える上で重要である。

今回のビジョンは、アクションプランまでを視野に入れ、重点領域、戦略的目標を設定している。アクションプランは、国立大学図書館全体に関わるものについては、新たに作られる委員会の中で検討される。各図書館に関わるものについては、各会員館がビジョンに示された戦略的目標に沿って各大学の中期目標等とすり合わせをしていきながら、その大学にとってもっとも相応しいアクションプランが形成され则认为している。

第 2 部

【パネルディスカッション】

まず、コーディネーターの引原隆士京都大学図書館機構長からパネルディスカッションを開始するに当たって第 1 部の講演のレビューがあった。

次に、高橋努広島大学図書館部長から、ビジョンを受けた委員会再編案が研究集会参考資料 2「国立大学図書館協会委員会の構成（案）」に基づき説明された。委員会は 5つの委員会に再編される。想定される事業内容はあくまで事務局での例示的な案であり、ビジョン策定後に委員会が実際に始まってから各委員会内で作っていく予定である。

また、杉田東京大学附属図書館情報サービス課長から、第 1 部の講演についての質問と感想が示された。

・深貝教授の講演に対して：ビジョンの重点領域 1 は知の共有だが、コレクショングリットの第 1 から第 4 象限にかけてだんだんと広がりを見せており、単純に考えるとグーグルに近づいてきているように見える。図書館は OPAC やディスカバリー等のサービスを通じて、学内構成員に外で流通する情報をサービスしてきたが、今後も情報へのポータルとしてありつづけるのか、あるいは外部のより良い情報環境の中で高性能なひとつの部品となっていくのか。情報環境の中の位置についてご教示願いたい。

・竹内館長の講演に対して：ビジョンは全方位型で様々な課題が提示されているが、小規模館では職員に意欲があっても圧倒的にマンパワーが足りない。図書館職員の機能強化が述べられているが、例えば千葉大学では本務のかたわら新たなことに取り組めるようなプロジェクトが編成されていた。この実践例について狙いや効果をご教示願いたい。

また、ビジョンへの感想として、2020 年という区切り方がよく、いま見通せるちょうど良い時点であり、新しい動きが出てくる時期ではないかと述べられた。

深貝教授からは、オープンアクセス、知の帰属、データの信頼性といったことで想定している様々なデータはどういうところでメンテナンスされ、あるいは情報が集まるのか、誰が責任を持つのかを理解してもらえればよいと回答された。

また竹内館長から、千葉大学では縦割りの組織と別のものとして人材育成ができたことが大きく、さらにアカデミック・リンク・センターに教員がいたことが重要な要因であることが説明された。

さらに、引原機構長から国大図協の委員会はプロジェクト的なものであるが、フレキシビリティについてどう思うかとの質問が出され、高橋部長から、以前は委員会の構成員は特定の館が選ばれていたが、やがて個人が選ばれるようになった。どうフレキシブルにしていくかについてはこれからの検討であるとの回答があった。

続いて、フロアとの意見交換、質疑応答が行われた。

・機関リポジトリとオープンアクセスについて要望がある。CiNii と各大学のリポジトリでメタ・データの記述に違いがあり、研究倫理的な側面からも典拠を書くときに困る。共通化を早急に実現してもらいたい。

これに対して、深貝教授からリポジトリはカバーページがないものもあり、典拠がわかりにくく一定レベルの記述が求められる。さらに、国際対応のため日本語論文にも英文タイトルやアブストラクトが必要であることが述べられた。また、引原機構長からは DOI を活用する可能性や人社系で日本語に閉じている論文の海外発信をどうサポートしていくかが大切であることが示され、高橋部長から、人社系の国際発信について広島大学が英文抄録のサポートを行っている事例が紹介された。

・各委員会はどこかでまとめるのかとの質問があり、高橋部長から委員会同士で調整する局面が出てくるものと思われる、フレキシビリティを確保し適宜調整していくことになる

の説明があった。

- ・参考資料 1-P.15 にある会員館の対応と委員会の役割の関係がよくわからない、地方から委員は出しにくい、という意見があり、引原機構長から委員会は育成の面もあること、尾城事務局長・東京大学附属図書館事務部長からは大学図書館は地方に限らず人が厳しいが、協会として委員会を作って活動していく意義があると協力の呼びかけがあった。

- ・千葉大学、お茶の水女子大学、横浜国立大学の三大学連携の事例や、研修のあり方 WG の事例がビジョンに含まれていて感心した（関連資料 参考資料 1 p.15、総会資料 p.45）。小規模大学からも人材育成のため人を出していきたい。委員会が人材育成の場となるのではないか、というコメントがあった。

- ・重点領域 3 の「新しい人材」という表現が自己否定的に読める気がするが、あえてこの表現を選んだのはなぜか。

これに対し竹内館長より、図書館が新しい役割を担うためには新しい図書館員が必要であり、今までのスキルと役割を否定するものではないことが説明された。

以上